

内在的基礎付け主義とドイツ観念論^①

入江幸男

はじめに

分析哲学と大陸の哲学の関係を考えるとき、最近のブランドムとマクダウェルによるカントとヘーゲルの再評価は注目すべき出来事である。ロックモアによると彼らの登場は、クワイン、セラーズ、ローティなどの仕事によって分析哲学が経験論から撤退することになったことの結果である^②。

以下では、これとは別の観点から、分析哲学とドイツ観念論の関係の可能性を検討したい。ここで取りあげたい観点は、認識論における内在主義と外在主義の論争である。これに加えてさらに基礎付け主義か反基礎付け主義か、という二分法で分類するならば、ドイツ観念論は内在主義的基礎付け主義に相当するだろう。現在の内在的基礎付け主義とドイツ観念論には類似性が見られるはずである。ここでは、ローレンス・バンジョー(Laurence Bonjour) とフイヒテを比較して、二人の立場の近さと遠さを考えたい。

第一節 内在主義と観念論の近さ

一 内在主義と観念論

プラトン以来の伝統では、命題的知識とは「正当化された真なる信念」(Justified True Belief, JTB) である。これに対して、一九六三年にゲティア (Edmund L. Gettier) からの批判があった。ゲティアの反例は、JTBであるけれども、我々の常識的な理解によると知識とはいえない事例であった。その後、ゲティアのJTB批判をうけて、知識の定義をめぐって論争が始まり、現在も続いている。この知の定義の試みの中から、外在主義という新しい立場が登場し、これに対して従来の立場は、内在主義と呼ばれるようになった。この対立が現代の認識論における最も大きな対立軸である。バンジョーは、この二つを次のように規定している。

内在主義 「認識の正当化は、信念をもつ人が意識的な反省に

よって (少なくとも原理的に) アクセス可能である

ような、その人の心の意識状態に内在する要素に依存しなければならぬ⁽⁴⁾」

外在主義

「認識的正当化は、その人の意識的な気付きの範囲をまったく超えて、心のそのような状態からみれば外在的であるような要因から生じてよい⁽⁵⁾」

パンジョーによれば、これまでの伝統的な認識論は、内在主義であった。もしそう言えるのなら、観念論もまた認識論における内在主義であるといえるだろう。実際、観念論が「存在するものは意識されている」と考える立場だとすれば、「信念の正当化もまた、意識されている」と考えるはずであり、観念論は認識的正当化に関する内在主義になる。

二 観念論は内在主義である —— フィヒテの場合

フィヒテにとって知識学（＝哲学）の課題は、「必然性の感情を伴って意識の中に現れるものの根拠はなにか（あるいは、知性における必然的な表象の根拠は何か）⁽⁶⁾」という問に答えることであった。（知識学の定義は、「学の学」「知の知」の探求と表現されることもあるが、考えられている内容は同じである。）知識学の課題は、認識論であったことがわかる。この知識学の方法について、彼は次のように述べている。

理論的知識学の方法はすでに『基礎』の中で述べられている。それは容易で簡単である。考察の脈絡は、ここにお

いてあまねく規制的なものとして支配しているところの、「自我が自己」の中に定立にするもの以外には何ものも自我に所属しない⁽⁷⁾」という原則に則ってたどられる。

これは、内在主義の立場で、認識について考察すると言う主張に他ならない。そして、「内在主義」という言葉こそ使わないが「内在的哲学」という似た表現を用いている。

観念論者の体系は、内在的哲学と呼ばれる。なぜなら、観念論者は自分の原理を意識のうちに見出し意識のもとにとどまり続けるからである⁽⁸⁾。

三 逆に「内在主義は観念論である」と言えるだろうか

もしこのように問うならば、事実に基づくその答えはノーである。なぜなら、現代の内在主義者のほとんどが観念論をとらないからである。では、なぜ現代のほとんどの哲学者は観念論をとらないのだろうか。それは、外界に、心ないし意識の外部に、物が実在すると考えるからである。これは唯物論ないし物心二元論を採用するということである。どちらにせよ、外界に物が存在すると考えるならば、そのときには、外界に存在する物が、その物の認識の原因であると考えているはずである。そうだとすると、物についての信念を正当化するのには、最終的には外界の物そのもの、あるいはその物と信念との因果関係であ

るということになるだろう。そして、この因果関係は、それら我々が気付いているようにとまいと、それとは独立に成立しているはずである。このように考えるならば、認識的正当化の外在主義を採用することになるのではないのか。

逆に言うと、内在主義は、外界の物の実在を認めないときのみ、成り立つのではないか。もしこのように言えるとするれば、「内在主義は観念論である」と言えそうである。このように言えるかどうか、内在主義者バンジューによる「内在主義の不可欠性」の主張を検討してみよう。

バンジューは、「私たちは、世界についての私達の信念が真である（あるいは少なくともほぼ真である）と考えるよい理由をもっているか？ 持っているのであれば、その理由は具体的にどのような形態をとるのか？」という問題は、「本質的に一人称の問題である」という。⁹⁾

そのことを、彼は次のように説明する。外在主義者Aは、ある人Bの信念bが、ある信頼できる認知プロセスXに基づいていることによつて、正当化されていると言っだろう。しかし、そのプロセスXの信頼性は、Bにとつては、単に外在的な事実であつて、一人称的、内在主義的にはアクセスできないものであるとしよう。「その認知プロセスXが信頼できるものである」というAの信念aは、どのように正当化されるのだろうか。それは、外在主義者Aのこの信念aが、さらに信頼できる認知プロセスYに基づいていることによつてである。しかし、このプ

ロセスYが、Aにとつて内在主義的にアクセスできないものであるとすると、Aの信念aは、Yにアクセスできるさらに別の研究者Cによつて、正当化されなければならない。以下同様が続くだろう。そこでバンジューは次のように結論する。「最終的に、仮定的でない結論に到達するためには、少なくとも何らかのプロセスの信頼性が、一人称的で内在主義的な認識的視野から、直接にあるいは媒介なしに得られるものに基づいて、確立されることが不可欠である」¹⁰⁾

このような立場に立つ限り、少なくとも基礎となる知識の正当化の段階では、外界における物の実在を前提することはできない。バンジュー自身は、観念論を否定し、実在論を主張しているのだが、その証明は、外界の想定なしに基礎付けられた知識から出発して、外界における物の実在を証明することによつてのみ可能になる。バンジューは『認識的正当化』の第5章で、実際にその順序で外界の認識の論証を試みている。この外界の証明は外在主義者のような知識の因果説による証明ではなくて、基礎的な知識から推論によつて対象を構成するという仕方で行なわれる。そしてこの基礎的な知識は主観に直接に与えられているものである。このような意味で、内在主義者は、観念論に非常に近いところに立っていると言えるだろう。

バンジューは後述するように内在的基礎付け主義者であつたが、内在的整合主義もまた、観念論に近いところに立っているのだろうか。彼が信念aを正当化しようとするれば、他の信念と

の整合性を確認しようとするだろう。そのとき、それらの信念の中に、「知覚に対応して外界に物が実在する」という信念が含まれているとすると、内在的整合主義に基づいて、実在論を主張し観念論を拒否することが可能になるだろう。内在的整合主義では、実在論と観念論の両者が、整合的な主張である限り、どちらも可能である。

しかし、内在的整合主義が、観念論を採用することになるとおもわれる一つの理由がある。それは、認識の整合主義者は、(常にはないとしても、多くの場合)真理の整合主義者となるということである。認識の正当化の整合主義は、整合性によって信念(ないし信念の体系)を、知識である、すなわち正当化された真なる信念である、とみなすことになるので、それは(常にはないとしても、ほとんどの場合)真理の整合説(信念ないし信念の体系が真理であるとは、それが整合的であることであるという主張)を伴うことになるだろう。真理の整合説は、真理の対応説を批判するものであり、信念が外的な事実との一致によって真になるとは考えない。これは(常にはないとしても、ほとんどの場合)実在論を否定し、観念論を採用することになるだろう。バンジョーもまた、正当化の整合主義は、真理の整合説を採用することで、「二種の形而上学的観念論」を採用することになるという。⁽¹¹⁾

以上から言えることは、ゲテニア問題に取り組む中で、内在主義を自覚的に採用し始めた人々は、彼ら自身が考えている以

上に、観念論に近いところに立っているということである。⁽¹²⁾ 外在主義が、伝統的な認識概念と根本的に異なっているとすると、内在主義対外在主義の論争は、認識論が成り立つかどうかの論争であるともいえるだろう。近代に始まった認識論は、本来的に観念論的な傾向を持っていたのであり、そのことが、認識論そのものの存続が問われる時代になって明らかになってきたのだと思われる。

第二節 バンジョーの内在的基礎付け主義と

フィヒテ

認識的正当化については、内在主義と外在主義の対立に加えて、基礎付け主義 (foundationalism) と整合主義 (coherentism) の対立がある。バンジョーはそれのように説明している。基礎付け主義 「正当化は、最終的に、他の信念の正当化にまったく依拠しない「基礎的な」信念から生じる」⁽¹³⁾
 整合主義 「正当化は、その信念体系の外部に訴えることなく、信念間の整合性や一致、あるいは相互扶助という関係から生じる」⁽¹⁴⁾

一 バンジョーの内在的基礎付け主義

『認識的正当化』での論争相手ソウザは、最近の基礎付け主義の代表者がバンジョーであると考えている。⁽¹⁵⁾ バンジョーが内在的基礎付け主義を主張する場合には、基礎的信念として考えるの

は、信念状態についての信念と、感覚についての信念の二種類の信念である。まず、彼がそれらの基礎的信念をどのように基礎付けるのかを説明しよう。

(一) 一階の信念についての「構成的気付き」と二階のメタ信念の「正当化」

バンジョーは、我々が何かの信念をもつときには、次の二つの気付き(あるいは二つの側面の一つの気付き)が伴っているという。一つは「命題的内容」についての気付きである。そしてもう一つは、「この命題内容の抱き方が、「問題にする」とか「疑う」とかでなく、「主張する」だ、というような、その内容の抱きかた⁽¹⁶⁾についての気付きである。これらの気付きによって、ある信念が他の信念や他の心的状態と区別された信念になる。「これらの気付きは、当の信念を私がついているという一階の信念を、現に生じている他の信念や、その他のまったく異なる状態とは異なる、まさにその信念にするという点で、その一階の信念や思考それ自体を(少なくとも部分的に)構成する⁽¹⁷⁾」したがって、この気付きは、一階の信念について反省する二階の信念ではない。これは一階の信念に組み込まれた「構成的気付き」(constitutive awareness)である。バンジョーはこの「構成的気付き」は、「不可謬⁽¹⁸⁾」であるという。「ある信念が、他の内容や他の状態とは区別されて、他ならぬその内容の信念であるのは、内容を構成する「組み込まれた」気付きによる。したがっ

て、この気付きは誤りようがない——その気付きがそれについて誤るような独立した事実や状況が存在しないのだから⁽¹⁹⁾」

バンジョーは、この不可謬の構成的気付きによって、一階の信念についての二階のメタ信念(「わたしはそのような内容の現に生じている信念をもっている」を正当化できるという。これが、彼が「基礎的な信念」とみなすものである。ただし、「組み込まれた」気付きの不可謬性は、それが正当化する統覚的なメタ信念まではおよばない⁽²⁰⁾。」つまりこれは基礎的な信念であるが可謬的である。

(二) 感覚的経験について「構成的気付き」とそれについての信念の「正当化」

バンジョーは、信念についてと同様な仕方でも、感覚内容についても構成的な気付きがあると言う。そして、それは不可謬であるという。「感覚内容を構成する気付きは、正当化を必要とせず、それに関する誤りが存在しないという意味で、不可謬である⁽²¹⁾」バンジョーは、この構成的気付きによって、感覚的経験についての信念が正当化できると主張する。これがもう一つの種類の基礎的信念である。ただしこの信念もまた可謬的であると言われる。

二 フィヒテの「知的直観」と

バンジヨアの「構成的気付き」の異同

フィヒテが基礎的な信念についてどのように考えるかは、後述することにして、ここではまず、フィヒテの「知的直観」とバンジヨアの「構成的気付き」の異同を確認しておきたい。「知識学への第二序論」で、フィヒテは、知的直観は、感性的直観と常に結びついており、また感性的直観も常に知的直観に結びついている、という。「知的直観」と「感性的直観」という「これら二つの直観は概念的に把握されなければならない。さらに、これだけではなく、知的直観は常に感性的直観と結びついている。」⁽²²⁾(強調は入江)

さらに、フィヒテは、表象は、知的直観と感性的直観と概念の三つが結合して初めて可能になる、と言う。「概念なき直観は、まさしく盲目である。「・・・」直観なき概念は、まさしく空虚である。自己意識、感性的直観、概念は、それぞれが分離しているときにはいづれも表象ではなく、それによって表象が可能になるものにはすぎない。」⁽²³⁾(強調は入江)

フィヒテによれば、知的直観は、感性的直観にその一部として内在しているのではない。しかしフィヒテによれば、我々に直接的に与えられている意識は、感性的直観ではなく、知的直観と感性的直観は、抽象によってそれから取り出すことが出来るものである。その意味では、知的直観は、感覚的経験に内在する構成的気付きであると言える。この点では、バンジヨアの

いう「構成的気付き」に似ている。

しかし、フィヒテの知的直観は、主観—客観であった。その点で、構成的気付きとは異なる。また、その知的直観は、感覚や信念のそれぞれに内在しており、それらの数と同数あるのではなくて、いわばカントの統覚とおなじく一つだけ存在すると思われるので、この意味では、知的直観は、バンジヨアのいう「構成的気付き」とは異なる。(さらに、後期の知識学では、この知的直観は、個的な自我を超えた普遍的な一つのものである、とされる。)

第三節 バンジヨアの「穏健な合理主義」と

フィヒテ

バンジヨアの基礎付け主義を考えるとときには、彼のアプリアリな知識についての見解も重要なので、これを次に確認したい。おそらくバンジヨアの哲学の全体像は、経験的な知識に関する「内在的基礎付け主義」と、以下に述べるアプリアリな知識に関する「穏健な合理主義」という二つの用語で捉えることができるだろう。

一 アプリアリな知識に関する四つの立場

クワインが、分析と総合の区別を批判したことによって、アプリアリな知識とアポストリオリな知識の区別も批判されることになった。これに対して、パトナムの批判やクリプキによる

アプリオリで偶然的な命題とアポステリオリで必然的な命題の主張等があった。しかし、一九九〇年代からアプリオリな知識をめぐる議論が再び活発になってきた。ピラーは、アプリオリな知識に関する立場を次の四つに分類している⁽²⁴⁾。

① 根元的経験主義 radical empiricism (Mill, James, Quine, Devitt)

経験だけが知識の源泉であり、アプリオリな知識はないという立場。

② 穏健な経験主義 moderate empiricism (Hume, Carnap)

経験的知識に加えて、分析的で必然的でアプリオリな知識があるという立場。

③ 穏健な合理主義 moderate rationalism (Descartes, Locke, Kant)

経験的な知識、分析的で必然的でアプリオリな知識に加えて、総合的で必然的でアプリオリな知識があるという立場。

④ 根元的合理主義 radical rationalism (Spinoza, Leibniz, Hegel)

全ての知識をアプリオリに知りうる、という立場。

「穏健な経験主義」とは、論理学や数学に関してのみアプリオリな知識を認める立場であり、ボゴシアン、ヘイル、ライト、などがいる。「穏健な合理主義者」は、論理学や数学に関してのみならず、事実に関してもアプリオリな知識を認める立場であり、

バンジョー、ピーコック、ピラー、などがいる。

二 バンジョーの「穏健な合理主義」

バンジョーは、論理学や数学のようなアプリオリな分析的知識だけでなく、アプリオリな総合的知識も認める「穏健な合理主義」者である。彼がアプリオリな総合的知識だと考えるのは次のようなものである。「何ものも、全面にわたって同時に赤くかつ緑であることはない」「ある出来事が第二の出来事より後であり、第二の出来事が第三の出来事より後ならば、最初の出来事は第三の出来事より後である。」「物理的なものは同時に二箇所には存在しない」「全ての出来事は原因をもつ」⁽²⁵⁾

彼は、内在的基礎付け主義者として、直接的経験に訴えることで正当化される基礎的信念があると主張するが、これから過去や未来についての信念、現在の観察できない側面についての信念へ推論できるかどうか、問題であり、もし出来なければ、我々は、懐疑論や独我論になると言う。もし出来るとするならば、それは、直接的経験から推論できるということであり、その推論が、アプリオリに正当化されねばならない、と言う⁽²⁶⁾。

(一) バンジョーによる「穏健な経験主義」への批判

バンジョーは、穏健な経験主義者と同じ仕方、数学と論理学におけるアプリオリな知識を認めたいうえで、それに加えて穏健な経験主義者が認めないような仕方、アプリオリな総合判断を認めようとするのではない。バンジョーは「穏健な経験主

義」は失敗すると考えている。

バンジョーによると、「穏健な経験主義」は、二つの主張からなる。一つは、アプリアリな知識を、論理学と数学に関する分析的な知識だけに限ること、二つは、アプリアリな知識を可能にするような合理的な直観を認めないこと、である。

バンジョーによると、「穏健な経験主義」が失敗するのは、合理的な直観によるのでなければ、アプリアリな知識を基礎付けられないからである。穏健な経験主義者の多くは、全てのアプリアリな知識を同義語の代入によって論理的な知識へ還元しようとする。そして、論理的な知識を、さらに矛盾律に還元しようとする。これに対してバンジョーは、矛盾概念の曖昧さを批判する。たとえば「全ての赤いものは、同時に緑色ではない」という言明は総合的であるとされるが、これの否定もまた矛盾するのではないのか。

(二) バンジョーは「穏健な合理主義」をどのように正当化するのか

バンジョーは上に述べたような総合命題が真であることをアプリアリに正当化するのには、「合理的直観」(Rational intuition)であるという。この直観は、(a) direct or immediate, non-discursive (b) intellectual or reason-governed である²⁸⁾とされる。この合理的直観は、「合理的洞察」(rational insight)「アプリアリな洞察」(a priori insight)²⁸⁾とか「アプリアリな直観」とか「知的な洞察」(intellectual insight)²⁹⁾とよばれる。これがアプリアリ

なのは、「正当化ないし明証が、あきらかに、命題内容の理解そのもの以外には依存していない³⁰⁾」からであり、「その内容の理解が、それが真であると考えられるための直接にアクセスできる理由を提供する³¹⁾」からである。

バンジョーが伝統的な合理主義者と異なる点は、合理的直観が、可謬的であり、訂正可能である、ということを確認する点である。しかし、アプリアリな知識は、経験によって訂正されるのではない。なぜなら、経験命題が直接にアプリアリな知識に矛盾することはないからである。それが矛盾するようにみえるとき、正確に言えば、それからの推論の結果がアプリアリな知識に矛盾するのである。そのときの推論の前提や原理は、アプリアリに正当化されている。したがって、ここでは、アプリアリな知識同士が衝突しているのである。

(三) バンジョーのカント批判

(a) バンジョーの誤解?

バンジョーは、カントを穏健な経験主義に分類する。それは、彼が、カントのアプリアリな総合判断を認めないからである。カントにとって、アプリアリな総合判断は、現象界について妥当する判断である。バンジョーは、そこから次のように批判する。カントのアプリアリな総合判断は、我々の心の働き方にもとづいて、成立する判断である。我々の心の働きかたは、どのようなにして知られたのだろうか。

①もしそれが経験的に知られたのであれば、それにもとづい

て、我々の現象界において成立するアプリアリな総合判断は、実は経験的な総合判断ではない。

②もしそれがアプリアリに知られたのであれば、それに基づいて、我々の現象界において成立するアプリアリな総合判断は、実はアプリアリな分析的判断である。

バンジョーのこのカント批判は、きわめて不十分である。なぜなら、彼はカントの論証が超越論的論証になっていることを無視しているからである。では、カントの論証が超越論的論証になっていることを考慮するとき、バンジョーの批判のどこに間違いがあるのだろうか。それは、②にある。われわれの心の働きかたは、アプリアリに知られるのであるが、それはアプリアリな総合判断なのである。したがって、アプリアリな総合判断に基づいて、純粹悟性の原則が説明されるとき、その純粹悟性の原則もまたアプリアリな総合判断であることになるのである。

(b) それでもカントは、バンジョーのいう穩健な合理主義ではない。

バンジョーのカント理解は間違っているだろう。そのとき、カントは、バンジョーのいう穩健な経験主義にはあてはまらない。しかし、バンジョーのいう穩健な合理主義にも当てはまらない。なぜなら、バンジョーが穩健な合理主義に本質的であると考える「合理的な直観」を、カントは認めないからである。

(四) フィヒテは、「根元的合理主義」である。

フィヒテは、全ての知識がアプリアリかつアポステリオリであると言う。

アプリアリとアポステリオリは、完全な観念論にとつては、決して二つのものではなく、全く一つのものである。それらは、二つの側面から見られたに過ぎず、我々がそこに到達する仕方によって区別されるに過ぎない。哲学は経験全体を先取り、この経験全体を必然的なものとしてのみ思考する。そのかぎりにおいて、この経験全体は、実際の経験と比較すると、アプリアリである。³²⁾

アプリアリにすることも出来るしアポステリオリにすることもできるような知識が存在するとき、そのような知識をアプリアリな知識と見なすという立場(例えば、クリプキ)をとるならば、フィヒテの主張は全ての知がアプリアリであるという主張になり、フィヒテは「根元的合理主義」に分類されることになる。

(五) フィヒテの「知的直観」とバンジョーの「合理的洞察」の類似性

バンジョーが穩健な合理主義を採用し、フィヒテが根元的合理主義を採用するという違いはあるが、バンジョーは「知的な直観」を認めることによってアプリアリな知識が成立すると主張する点で、フィヒテと似ている。フィヒテは「全知識学の基

「礎」(二七九四)の冒頭の第一根本命題を、論理法則 $A \parallel A$ を可能にする条件として証明する。フイヒテによれば、「AはAである」とは、「もしAならば、Aである」と言う意味であり、前件と後件のこの結合の必然性は、論理的な必然性である。この論理的な必然性を成立させているのは、Aを考える自我とAがそこに存在する自我の同一性である。つまり、第一根本命題「自我は根源的に端的にそれ自身の存在を措定する」(Das Ich setzt ursprünglich schlechthin sein eigenes Seyn) に基づいている。この第一根本命題は「事行」(Thatandlung)の表現である。この事行は知的直観と同じものである。フイヒテにおいても論理法則は知的直観によって可能になる。

おわりに 直観の限界と意味の全体論批判

バンジューは基礎付け主義を主張するが、これは他の信念から独立に正当化される信念の存在を認めることであり、意味の全体論とは相容れない。しかし他方で、バンジューは、アプリオリな知識の可謬性をみとめていた。彼が、アプリオリな知識や基礎的な知識の可謬性をみとめるのは他の知識との整合性を優先させるためであったので、彼は意味の原子論にも反対することになる。彼の立場は、分子論的意味論に近いものになるはずである。これと同様のことがフイヒテにも言えそうである。フイヒテは、意味の全体論を思わせる主張をしばしば行なっている。しかし他方で、三つの根本命題を立て基礎付け主義を採

用しているので、意味の全体論だとは言い切れない。フイヒテもまた、分子論的意味論に近いかもしれない(この点は、今後つめる必要がある)。

バンジューは観念論を批判しており、dialectical という語を使用すること以外には、ドイツ観念論への接近を思わせるものはない。しかし彼の立場は、本論で見てきたようにドイツ観念論とりわけフイヒテ哲学に近いように思われる。その近さは、彼が認識の内在主義を採用し、基礎付け主義を採用し、アプリオリな知識を認める点にある。しかもこれらは、彼の哲学の基本的な論点である。確かに現代の分析哲学がドイツ観念論を再評価するときの主流であるのは、ブランドムの意味の全体論や、マクダウエルの直観と概念の二元論批判からのドイツ観念論再評価である。しかしそれとは異なる、もう一つの可能性が認識論の内在主義とフイヒテとの間にあるのではないだろうか。

註

- (1) 本稿は、日本ヘーゲル学会(東北大学、二〇〇九年六月十三日)での発表用原稿を短くしたものである。
- (2) Tom Rockmore, *Hegel, Idealism, Analytic Philosophy*, Yale University Press, New Haven and London, 2005. なお同書にのこつは、入江に よる書評「Tom Rockmore, *Hegel, Idealism, Analytic Philosophy*」(「フイヒテ研究」第十六号、二〇〇八年、一三三―一三二ページ)で紹介した。
- (3) ローレンス・バンジュー(Laurence Bonjour)は一九四三年生ま

れ、プリンストン大学でリチャード・ローティのもとで学位を取得後、テキサス大学で教えて、その後ワシントン大学の哲学教授となり、現在に至る。*The Structure of Empirical Knowledge* (1985)で、認識論における内在主義的整合説を主張し、基礎付け主義と外在主義を批判していった。*Defense of Pure Reason* (1998)では、「穏健な合理主義」を主張し、経験主義を批判して、アプリアリな知識を合理的直観に基づいて主張する。*Epistemic Justification: Internalism vs. Externalism, Foundations vs. Virtues* (jointly with Ernest Sosa), (2003) (ローレンス・バンジュー&アーネスト・ソウザ著『認識の正当化』上枝美典訳、産業図書、2006)では、かつての整合説を批判して、内在的基礎付け主義を主張している。彼の基礎付け主義は、デカルト、チザムの基礎付け主義に近いといわれている。

- (4) Laurence Bonjour and Ernest Sosa, *Epistemic Justification: Internalism vs. Externalism, Foundations vs. Virtues*, 2003, p.7. ローレンス・バンジュー&アーネスト・ソウザ著『認識の正当化』上枝美典訳、p.5.
- (5) *Ibid.*
- (6) Johann Gottlieb Fichte-Gesamtausgabe. Hrsg. v. d. Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Stuttgart-Bad Cannstatt, Reihe IV, Bd. 2, S. 18. (以下、GAIV-2, 18のよう記す)『新しい方法による知識学』フィヒテ全集、哲書房、第七巻、六ページ(以下全集七巻六ページのよう記す)。
- (7) *Fichtes Werke*, hrsg. von I. H. Fichte, Walter de Gruyter & Co., Berlin 1971, Bd. I, S. 333. (以下、SW I, 333のよう記す)『知識学の特要綱』(一七九五)、全集四巻三六〇ページ。
- (8) GAIV-2, 22. 『新しい方法による知識学』(一七九八)、全集七巻一一ページ。

本稿の元の原稿を読まれた上枝美典氏から、外在主義的な観念論もありうるのではないかとのご批判を受けた。確かに認識に関して外在主義をとる観念論は理論的にありうるだろう。例えば、シェリングやヘーゲルの観念論のなかに外在主義の認識論を読み取ることは可能であるかもしれない。筆者はフィヒテのような純粋な観念論こそ、もっとも徹底した観念論であり、観念論は本来そのような立場をとるべきだと考えているので、もっぱらフィヒテを念頭に論じてしまい、その点の説明が不十分であった。上枝氏に感謝し、これについては別途論じることにした。

- (9) Cf. *ibid.* p.174. 前掲訳二二三ページ。
- (10) *Ibid.* p. 39. 前掲訳四七ページ。
- (11) *Ibid.* p.54. 前掲訳六四ページ。
- (12) 'The Coherence Theory of Truth' (Stanford Encyclopedia of Philosophy)によると、最近のロリン・マッキンヤタガートは、「整合主義者達は、観念論にコミットしている」と指摘して、整合主義を批判しているそうである。
- (13) *Ibid.* p.7. 前掲訳七ページ。
- (14) *Ibid.*
- (15) *Ibid.* p. 202. 前掲訳二七一ページ。
- (16) *Ibid.* p. 62. 前掲訳七八ページ。
- (17) *Ibid.*
- (18) *Ibid.* p. 64. 七九ページ。
- (19) *Ibid.*
- (20) *Ibid.* p. 64. 前掲訳八〇ページ。
- (21) *Ibid.* p. 70. 前掲訳八六ページ。
- (22) SW I, 463. 全集七巻四一ページ。
- (23) SW I, 473f. 全集七巻四二二ページ。
- (24) ジョージ・ピラーが二〇〇五年十二月アメリカ哲学学会 (APA)

Eastern Division の大会で行った発表「Epistemic Possibility, Metaphysical Possibility, & the A Priori」で配布されたハンドアウト⁴。

- (25) Laurence Bonjour, *In Defense of Pure Reason*, Cambridge U. P., 2002, p.2.
- (26) *Ibid.*, p.3.
- (27) *Ibid.*, p.102.
- (28) *Ibid.*
- (29) *Ibid.*, p.134.
- (30) *Ibid.*, p.102.
- (31) *Ibid.*
- (32) SW1, 447. 全集七卷三九二ページ。
- (33) SW1, 99. 全集四卷九九ページ。

「報告」二〇〇九年六月十三日、東北大学にて
(いりえ ゆきお・大阪大学)